

伊勢 司

今は昔、小学生だったは知れても「インド人」ます。僕もその雰囲気にも大きく異なります。そこには、和歌山県の山あいにある学校でみんなと寮生活を送っていました。耐えられず周りに仲間をしてみんなと寮生活を送っていました。しかし、何度周りを見渡した。た隣国でした。さて、始業式

え方を自らの体験を持って感じた瞬間でした。

さて、始業式

その学校の山伝いには真言宗の聖地、高野山がある自然豊かな場所でした。そこからいくらかの時間が経ち、僕はヒンドゥー教の聖地、バナレスにおりました。

そして二年目から学ぶことも僕以外は全員インド人です。そのときはまださかとは思いましたが、南と北では言葉が通じない状況がある中で、日本人であろうがなかろうが、純粹に同じ学生といへばインドスタ

ベナレスでの三年間の
留学生活を始めた僕は、

国籍の者には別に留学生と言いました。けれども周
 国籍の者には別に留学生と言いました。けれども周
 国籍の者には別に留学生と言いました。けれども周

その日々の学び舎として
BHU（バラナシ・ヒン
ドゥ大学）を選びました。

バラナシでインド人を知る!?

初年度はヒンディー語のクラス、そして二年目からは結果的に観光経営学科で学ぶことになりました。というのもヒンディー語クラスは外国人向けであったため世界中さまざまな国から留学生が来ています。なので確かにインドで生活はしているけれども、毎日が語学学校に来ているような感じで、これでは「インド」

生卒で入学しました）、それゆゑに担当教授はものすごく強氣です。そして始業式当日、教授は先制攻撃と言わんばかりにまず、「君らの代わりはいくらでもある、なので私の言うことを守り、勉強のペースについてこれなければ速やかに辞めなけらう」と皆に伝えました。その言葉から教室は緊迫した雰囲気包まれ

は「さすがに僕の代わりは」の留学生はどこにもいないじゃないか！」です。しかしその後、僕の考えは間違っていたことに気がきました。担当教授は南インドのケララ州から来ており、北インドのバラナシとは話す言語（ケララ州はマラーラム語でバラナシがある）に広大な国土を有し、国の中にもさまざまな人種や宗教として言葉

も違えば、使用する文字と、そのインド人の考

各々で自宅近所のテラバ、僕は一つにこの「緩
 ー（仕立て屋）」に持ってやかな統一感があるの
 行き制服にしてもらいまではないかと思ひます。
 す。そして一週間後、みそしてこから、僕の本
 んなが制服を着てくると、当の意味での「インド」
 あら不思議。色味に統一と「インド人」を知る二
 感はあるぞ、細部のデザ年間が始まるのです。

 いせつかさ 1988年生まれ。同志社大学商学部
 卒。バラナシヒンドウ大学 観光経営学科 修士課程修
 了。インド政府公認 旅行業務取扱管理者。及び 日本
 にて総合旅行業務取扱管理者。「日本とインド、人を
 つなぐ」をモットーとした株式会社ジャパンディアを
 設立し代表を務める。旅行事業を中心にインドに関
 する各々の希望や相談一つひとつに丹念に応じている。

イスティルなのか、まず制バランなのです。ポタンのともに数メー数が違えば色も違い、襟トルの生地での形や大ききもバラバラ支給されるのです。けれどもインドの良きとは何かと問われれば



「緩やかな統一感」?!…
制服姿の著者（左）